

# あちるむかじ

～まじめ 一途系後輩キャラにたつぱり愛されちゃう百合音声～

特典用 前日譚// ハナリオ&アーラームボイス集 台本

①『【プロローグ・二年前の四月】新しい出会いには新しい服を』（420文字）

二年前の四月。

主人公とゆずこ、一緒にショッピングへ訪れ、洋服屋にいる。ゆずこ、このところ元気のない主人公を、無理やり連れだす形でやつてきた。しかし、主人公はさつきから暗い色の服ばかり選ぼうとしている。

主人公は、恋人と別れた直後。

ただでさえ恋愛に後ろ向きだった主人公は、失恋により、完全に何もかもに対してもあきらめモードになってしまった。

気が小さく心配性のゆずこは、すっかり妄想が肥大している。

主人公が人生を悲観して自殺してしまうのではないか？ と内心不安でしようがない。ゆずこ、心配になつて声をかける。

SE・B1の1

喧噪 冒頭5秒くらいまで流し、それから台詞。全編で小さく流す

「ねえ！ ……ちょっと待つて。

【その服、なんか喪服みたいだよ。やめなよ】と言いかけるが、不謹慎なのでやめる。一瞬言葉を選んで、間が空く。ゆずこは失言が多いのを自覚しているので、こういった間が多い

い

こっちにしない？ 爽やかな、春の色！」

ゆずこ、適当に言つたので、とても主人公に似合うとは思えない色を選んでしまう。慌てて、別の服を指さす。

「じゃなかつたら、あつち！

さつき一回手に取つて、棚に戻した服。気に入つてたんじゃないの？

【主人公の言葉を復唱し。ゆづこは主人公に似合うと感じる。

『似合わないとと思う』？

そんなことなくない？』

それは、青のストライプのブラウス。

よくあるデザインだが、ゆづこは主人公に似合うと感じる。なので棚から手に取り、主人公の身体に服を当てて言う。

SE・B1の2 服がかかつているラックから、ハンガーを外す「カチヤ」という音

※もともとの音が大きいので小さめに

【よく似合うので、声が明るくなる】

似合うよ！

このデザインなら、店の制服の下に着ていいんですよ？  
これ着たあんたを見て、めろめろになるお客さんがいるかもよ」

ゆずこがそう言つた途端、主人公の顔が暗くなる。

『ゆずこ。私、もうそういう、恋愛とかは……』と主人公。  
ゆずこ、気を付けていたのに、結局失言してしまった。

墓穴を掘つたと思いつつ、励ますつもりで苦し紛れに話を広げる。

それはその場しのぎの、深い意味もなく言つたことだが、のちに本当になる。

【その場しのぎではあるが、これ以上失敗しないように、努めて冷静に話す】

いや、恋愛に限つた話じゃなくて。もっと……広い範囲の話！

あなたの新しい友達になる人かも知れないし。

ずっと一緒に働いていく人かも知れない。

つまり。どこに運命の出会いがあるかわからんないんだから。

せめて、いつもいい感じの服を着てほしいってだけ！

【※マークから次の※マークまで願いを込めて、占い師のような気分で】

※……たとえば、この服を着た日。

『城倉珈琲店（しろくらこーひーとん）』に来た、お客さんに対して。

あんたが何の気なしにした親切が……。

巡り巡つて、あんたをとても、幸せにする。

そんなことが起こる！ 気がする。※

【完全に口から出まかせだが、主人公に明るい気持ちになつてほしいのは本当。ゆずこ自身  
だんだん不安になつてきて、最悪の場合も保証する、というつもりで言う】

もし、特に何にも起きなくて。

独りぼっちだって思つた時は……あたしがいるから。

だから、これにしてみない？

【わかった。ありがとう、ゆずこ】と言われて嬉しくなり、安堵する。思い付きで言つた  
ことではあるが、未来予知になればと心から思う  
よし！ 試着して来い！」

\*\*\*

## ②『【二年前の六月】はじめて話した日』（232文字）

①から約一か月後。六月上旬の、比較的すいている平日の午後三時ごろ。

主人公、仕事中。

主人公、あれからこの前買ったブラウスを何度も着てみたもの、特にそれらしい出会いはなかつたと感じている。

今日も着てみたが、いつもと何も変わらない。

SE・B2の1 環境音（小さな音でずっと流す）

SE・B2の2 コン、コン、と主人公がゆっくり階段を上る音（0—8秒目くらいまで、音声よりゆっくり目に少し静かにお願いします）

SE・B2の3 主人公がみちるの席へ向かう足音）※0—7秒目くらいまで

そんな折、二階席の客へお冷を配りに行くと、最近よく来ている少女が、ひとり声もあげずに泣いているのに気づく。

主人公、思わず泣いている姿を凝視してしまい、少女と目が合う。

彼女こそが羽鳥みちる。

みちる、泣いてる姿を見られ、申し訳なさそうな、怯えたような声を出す。

【まさか目が合うとは思わず、申し訳なさそうな、怯えたような声で】  
【あっ……】  
【無理に泣き止もうとして、声を殺して、ぐす、と鼻をすする】  
【すいま……せん……】

みちるは、地域でもそこそこの進学校『公立 一の森』に通っている。

みちる、一の森に無事合格し、四月から通い始めたはいいものの、入学式直後に体調を崩してしばらく学校を休んでしまい、クラスになじむのに失敗してしまった。

そのため、六月になつても友達ができないことを深く気に病んでいた。

主人公の働く『城倉珈琲店』は、みちるにとつては通学路。

そのため、放課後は時折この店を訪れるようになつっていた。

主人公、泣いているみちるに、ごく小さな声で、他の客に聞こえないよう『大丈夫?』と声をかける。思えば彼女は、いつも一人で来店していることに気づく。

「ありがとうございます。大丈夫、です……。

特に何かあつたとかじや、ないので……。

【また、ぐす、と鼻をすする】

ほんと、ごめんなさい……】

主人公『大丈夫』とは言われたものの、みちるのことが気になる。ポケットに飴を入れていたことを思い出し、取り出してみちるにそつと差し出す。

SE・B2の4 コトノ、と机に飴を置く音

※『コ カ』という音がしますが『コ』の部分のみでお願いします

【『あげる』と言われ】

あっ……。

【他のお客さんには秘密ね。いつも来てくれてありがとうございます……！　はい。時々。来させて、いただいてます……。あ、ありがとうございます……！】

【ずっと伝えたかったので、思わず店の感想を必死に述べる】

このお店。とても、すてきで。

来ると、落ち着くって、いうか。

ほつと/orするんです……。

すぐく、好き。なんです。

【いつでもおいで。何時間でもいていいから。あそこの一人用の席、用意しておいてあげる】と言われ

本当ですか……？

【主人公が優しいので、また涙が出てくる。泣きながら】

いつでも来て、いいんですか……？

【結局また泣き出してしまいますが、泣く声そのものは小さい】

ありがとうございます……。飴も、ありがとうございます……。嬉しい、です……。

【やっと少しだけ笑顔になる】

大切に……食べます……】

\*\*\*

③『【二年前の八月】アルバイト志望です』（66文字＋243文字）

八月。世間は夏休み。

主人公、休みだが店にいる。ゆずことコーヒーを飲みながら談笑中。店の入り口には『アルバイト募集』の張り紙が出ている。

SE・B3の1 環境音（小さな音でずっと流す）（ごく小さめに）  
SE・B3の2 コトン、と机にグラスを置く音

【「ひみつのかれん」「外国人お姉さんキャラにたっぷり愛されちゃう百合音声」のヒロイン、カレン・ラングフオードのまねをする。『【二年生の七月】告白』参照】  
暑くなってきたわね。お話ってなあに？

【普段の口調に戻つて】

……」れ、誰のセリフだつけ？まあいつか。  
しかし偉いですなあ。休みの日も店にいるなんてさ。

ああ、アルバイトの求人出してるの。

店に直接問い合わせがあるかもしれないから、つい待機しちゃつてるつてわけね。

【誰か気になる人がいるのかと思い、いたずらっぽく】

……誰か、心当たりでもあるとか？応募してきそうな人に。

『そんなんじやない？』

【嬉しそうに】

ふーん、どうだか。で、話つてなんだつけ」

主人公、夏休みに入つてから店に現れないみちるのことが気になつていて。しかし、よく考へると、彼女について何も知らないことに気づく。制服すらどこの学校か見当もつかないため、ゆずこに聞いてみることにする。

「うん。水色のブラウスの、ブレザーの学校？」

「一の森（いちのもり）じゃない？今年に入つて制服変わつたらしいよ。あそ、」  
「一の森の子となんかあつた？」

主人公、ゆずこにみちるのことを話そくか悩む。

単純に『最近よく来てくれる子が、一の森の生徒のようだ』と言えばいい話なのだが、なぜか恥ずかしい。

するとそのとき、店の扉が開き、みちるが入つてくる。

夏期講習の後なので、夏休みだが制服を着ている。

SE..B3の3  
SE..B3の4

店の扉が開く音  
みちるの足音 ※3秒くらい

【息を切らして】

あの！ 表の張り紙を見てきました！  
い。いつも来てる……羽鳥です！ 「」で働き、たいです。履歴書持つてきました。  
面接。受けさせてください！」

しばしの間。

【みちるの制服姿を見て、すべてを察する。やや小声で】  
……なるほどね？」

\* \* \*

④『【二年前の八月】『挨拶』

【はきはきと。しかし、うるさすぎず、フレッシュな印象で。「アルバイト先に、こんな子が新人アルバイトとしてやってきたら、働きやすそうで嬉しい」と思うような感じで。みちる自身は内心とても緊張している。「はとり」と「みちる」の間で一呼吸置く】

羽鳥（はとり）みちるです！ 公立一の森（いちのもり）の一年生です。

【少しだけ自信なさげに】

接客のアルバイトは初めてです……。

【正直なところ、うまくやつていけるかは不安。しかし、それ以上に主人公と一緒に働くという夢が叶つて嬉しくてしようがない。その気持ちを主人公に伝えたい】  
でも、先輩と一緒にこのお店で働くのが、夢でした！

先輩。今日からご指導のほど。よろしくお願いします！

\* \* \*

⑤『【二年前の十二月】日頃の感謝を込めて』（427文字）

十二月。夜遅く。

主人公、仕事を終え、更衣室へ向かう。

ひときわ激務だったので、肉体的にも精神的にも疲弊している。

主人公は更衣室では着替えない。しかし、ロッカーは利用している。

SE..B5の1  
SE..B5の2  
環境音（小さな音でずっと流す）  
足音 ※10秒目まで

主人公、更衣室の扉を開けると、先にあがつたはずのみちるが待っていたので驚く。みちるは、両手に小さな手提げ袋を抱えている。主人公に一礼すると、みちるは緊張した面持ちで話しかけてくる。

【ドキドキと待っていたら、急に扉が開いたので顔を上げる。声が上ずっている】  
……あ！ 先輩！ お疲れ様です！

【羽鳥さん、どうしたの？ もう帰ったんじゃなかつたの？】と聞かれ。恥ずかしさで言い出しづらく、少し間が空く  
言い出しづらく、少し間が空く】  
先輩を、待つてました。

【少し間が空く】

あの！ これ、受け取ってください！」

SE・B5の4 がさ、と手提げ袋を差し出す音 ※0—3秒くらい

【主人公が『なんのプレゼントかわからない』という顔できよとんとしているので、聞かれる前、に慌てて答える】  
先輩。いつも本当にありがとうございます。

中身は、お菓子です。  
お仕事で、疲れてると思うので……甘いもの、どうぞ！

【ミス】を言いつらそうに、申し訳なさそうに】

この前、ミス。しちやつた時も。

先輩がすぐ気づいて、代わりに対応してくださつたから……トラブルにならずに済みました。あの時は、本当に申し訳ありませんでした。  
……でも、優しくフォローしてくださつて。

【思い出し、泣きそうになる】  
本当に嬉しかつたです……。  
だから、その。  
本当は、お誕生日に何かお渡しできたら、って思つてたんですけど。  
【デフォルト主人公の場合誕生日は5月なので、8月にバイトを始めたみちるはまつたく間に合わなかつた。落胆した調子で】

今年はもう間に合わなかつたみたいなので……。  
日頃の感謝の気持ちということで。

【勇気を出して】

受け取って、ほしいです！」

主人公、突然の贈り物に驚くが、素直に嬉しい。

みちるはアルバイト経験がなく、最初こそ不慣れだったが、素直で勤務態度が良く、非常によく働く。最近は特に接客態度が良くなってきた。

なので主人公は『みちるを雇つてよかったです』と心から思っている。

主人公、『ありがとうございます。嬉しい。いただくな』と笑つて受け取る。

「あ……！　ありがとうございます。」

【中身、今開けて見てもいい？】と聞かれ。中にはお菓子だけではなく、手紙も入つているので、見つかるのが恥ずかしい】

あ、それは、その……。

ごめんなさい、中身はおうちに帰つてから見ていただけると、嬉しいです！

【恥ずかしさで早口になる。『お疲れさまでした』まで言い切つて、早く逃げ出したい】  
すみません、失礼しますっ！　お受け取りいただきありがとうございました！　お疲れ様でした！」

一步一歩、少しずつ主人公から逃げる音

SE..B5の5  
SE..B5の6

バタバタと走り去る音

主人公、きょとんとして見送る。

中身が気になり、みちるは去つてしまつたことだし……。と、思わず開ける。  
中には、お菓子の入つた箱の他に、手紙も入つていた。

主人公、逃げるようになつていったのはこれか、と思いつつ、心が温かくなる。  
なんだか、疲労まで少しどれたような気がする。

\*\*\*

⑥『【一年前の一月】はじめの訪問』（973文字）

年が明け一月。世間は冬休み。

北国なので、冬休みが長い。学生は一月下旬まで休みが続く。主人公、今日は先日のお菓子のお礼を兼ねて、みちるを自宅に招き、夕食を『ごちそうす』ることになっている。

過去の経験から警戒心が強く、あまり人を家にあげない主人公だが、みちるであれば問題ないと判断している。

主人公にとってみちるは、従業員たちの中でもかなり親しい存在になりつつある。

SE・B6の1 みちるが主人公の自宅のチャイムを鳴らす音

【※マークから※マークまで緊張した面持ちで。④並みに声が震えている】  
※こんばんは。羽鳥です！】

SE・B6の2 ガチャヤ、と主人公が家の扉を開ける音  
SE・B6の3 ガチャヤ、と主人公が家の扉を閉める音

みちる、がちがちに緊張している。

年が明けてから初めて主人公に会うというのもあるが、何より主人公の自宅で一人きりで過ごすというのが大きい。

今日のことは、家族にも話している。

羽鳥家では、主人公は『友達ができるず、不登校になりかけていたみちるを救つたヒーロー』のようないな存在。

みちるは家でも主人公の話ばかりしているので、みちるの父親も母親も、主人公に非常に詳しい。

特にみちるの母親は主人公のことが大好きで、みちるが主人公宅に招かれたと聞いて大騒ぎ。

慌ててお土産のお菓子を買ってきた。

「明けましておめでとうございます。先輩！」

本日はお招き、ありがとうございます！

あつこれお菓子です。母がよろしくお願ひします……！

『ありがとう。でも、悪いな。うちでご飯食べるだけなのに……』と言われ

とんでもないです。先輩には本当に世話をなつてるので。

うちの両親、わたしがお店の話、家でよくしてゐるせいか。先輩のこと大好きで。

今日、遊びに行くって言つたら、持つていきなさいって……。  
どうぞお召し上がりください。

【『じゃあ、頂戴します。あがつて？』と言われ】

はい！ お邪魔します！※

SE・B6の4

靴を脱ぐ音

SE・B6の5

二人が家の中に入つていく足音 ※5秒くらい

主人公、リビングにみちるを通し『飲み物を出すから座つていて』とキッチンへ向かう。みちるは従い、ドキドキしながら主人公の家を眺めている。

一見落ち着いて座つているように見えるが、内心は『写真撮つて帰りたい！』『先輩のにおいがする……！』『先輩の家、おしゃれかよ！ ミニシアター映画に出てきそうな家かよ！』と大興奮。

主人公の自宅がイメージ通り上品でかわいらしいものだったので、ますます主人公への憧れが強まっている。

「あっ、はい。恐れ入ります。じゃあこの辺に座つて……待つてます」

SE・B6の6

みちるがリビングの椅子の近くに座る音 ※0—3秒くらい

「先輩のおうち、すごく素敵ですね……！ 可愛くて、おしゃれです！」

先輩って、こちらにお住まいだったんですね。

お店の裏手にある、大きなおうち……。

すごく素敵な場所だから、一体、誰が住んでるんだろうって思つてました。

【恐らくそうだとは思うが、確証はない。少し自信なさげに】

先輩はここに、お一人ですか？

【『そうだよ。祖父の持ち物なんだけど、今は私が一人で住んでる』と言われ】  
やつぱりそなんですね……こんな広くて、映画に出てきそうな家に一人暮らしなんて、羨ましいです！

友達も、先輩のこと『『デキる女』』って感じでかつこいいね』って言ってましたよ！

【『ああ、この前お店に来てた子たちのこと？』と聞かれ】

そうです！ あの二人です

主人公、年末に店に来ていた女子二人組のことを思い出す。

来店時にみちるに手を振つていたのを見たので、友達なのかと思っていた。

二人はみちるとは容姿の雰囲気こそかなり違つていたが、とても仲がよさそうだった。

主人公、はつきりと本人には聞かなかつたものの『みちるは学校生活に悩んでいたのは？だからあの時泣いていたのでは？』と思つていたので、安堵する。

「はい、実は先輩と初めてお話しした時、わたし、学校に友達が一人もいなくて。

【『ばつち』を言いづらそうに。『ばつち』は『ひとりばつち』の略語】

ばつち、だつたんですけど……。

後期になつてから、選択授業が始まって。それがきっかけで、友達ができたんです！あの時はご迷惑おかげして、本当に申し訳ありませんでした。

でも、今は学校も、すごく楽しいです！」

主人公、みちるの嬉しそうな笑顔に心からホッとする。  
みちるが幸せそ.udと、自分も嬉しいと感じる。

『そつか。よかつた』と微笑んで、飲み物を差し出す。

SE・B6の7 主人公が飲み物を注ぐ音  
SE・B6の8 コト、と机に飲み物を置く音

「あっ、ありがとうございます……。

【少し間を置き、ドキドキと切り出す】

あの、先輩。先日はありがとうございました。

お菓子と、一緒に入れた、手紙……読んでくださつて。  
お。お返事までもらえちゃつて。

『お返しに、うちで、飯でもどうですか？』って言つていただけるなんて、夢みたいです。  
手紙にも、書きましたけど……先輩はわたしの憧れなので。

今日一緒に過ごせるのが、とてもハッピーです！

よく、お店の皆も遊びに来たりしてますか？

【『ううん。呼んでない。ここに住んでること自体、私のいとこで、お店のバリスタの金剛寺さんしか知らないよ』と言われ驚く】

え？ そうなんですか？

先輩がここにお住まいなのは。他はバリ스타の金剛寺（こんじょうじ）さんしか存じでない？

【自分が場違いのような気がして焦る】

わ、たし。来てよかつたんですか？」

金剛寺とは『城倉珈琲店』でバリ스타を務める主人公の一回り年上のいとこの男性。  
明るく親しみやすい性格のオネエで、筋肉質でケンカがめっぽう強い。

『城倉珈琲店』は夜間も営業しているので、店の用心棒的存在でもある。

主人公 続いて、この家についての説明を始める。

『羽鳥さんはいいの。

女の子だし、お人柄もわかつてゐるし。でも、他の人にはあまり言わないようにしてる。  
女一人だから、怖いこともあるし。

ここ、もともとは店のオーナーでもある祖父の持ち物なんだけど……。  
周りの人は、今でも祖父がここに住んでるって思つてゐみたい。  
だからそういうことにしてる。

お店の皆さんにも、お客様にも。

私がここに住んでるのも、今日ここに来たことも、秘密にしてね』  
と話す。

「あ、そうですよね……。女性で、お一人だと、不安なことも多いですもんね」

みちる、主人公と自分だけの秘密がでけて、気分が高揚する。

みちる、とつくに主人公に恋しているが、恋人になるのはまず無理だらうと考えていた。  
だが、今の話で『もしかすると少しほ望みがあるのでは?』と期待してしまふ。

嬉しさのあまり、声が思い切り明るくなる。

「はい！ 秘密にします！

ふふ、先輩と秘密……嬉しいなあ。

あ、の。先輩。わたし、先輩よりだいぶ年下だし……。

お話してて。子どもだなつて思うこともあるかもしれないんですけど。

これからも親しくさせていただけたら、嬉しいです！

【『いらっしゃりこそよろしくね。今日は楽しんでいつてください』と言われ。とても嬉しくなる】

ありがとうございます！ はい、では、いただきまーす！」

\* \* \*

⑦『【一年前の五月】わたしに甘えてくれませんか?』（518+407文字）

五月。天気の良い夕方。

主人公、③と同様に、店でゆずこと会っている。

主人公とみちるはあれからすっかり親しくなり、時々会って話す関係になつていて

主人公、仕事中は『羽鳥さん』のままだが、仕事外では『みちる』と呼ぶようになつている。

みちるはもうすぐテスト期間。

今日はアルバイトは休みなのだが、主人公に借りた本を返しに店まで来るといふ。

主人公、ゆずこと談笑しつつ、みちるが来るのを待つて少しそわそわしている。

SE..B7の1 外で鳥が鳴く音 ※0—9秒目くらいまで。小さめに  
SE..B7の2 環境音（小さな音でずっと流す）

「【『んーっ』っと伸びをして、窓の外を見ながら】

んーっ。すっかり暖かになりましたわねえ。

今年、ほんと寒かつたよね。四月になつても雪残つてたし。

へえ、週末もみちるちゃんと会つてたんだ？

一冬でずいぶん仲良くなつたのねー。

いや、お互い休みの日でも、やっぱりこの店で茶あ飲んでるあたしらも。  
相当仲良しだけどネ……。

あの子一の森（いちのもり）の……先月二年になつたばつかか。

うちらと何歳差だ？ ちょっと歳離れてるよね？

でも話合うんだ！ いーなー、そういう友達」

ゆずこ、去年の今頃はふさぎ込んでいた主人公が、みちると親しくなつて以来随分明るくなつたのが嬉しい。

『もしや、①で自分がした、あの予言は的中したのか？』と考えている。

「あの子いいよね。真面目だし。  
どっちにしろ。あんたが家にあげるなんて、よっぽど気に入つてるんだね」

そこでみちるが来店してくる。

SE..B7の3 店の扉が開く音

「おー、噂をすれば本人が。

おーい。みちるちゃん、ここだよー」

みちるに貸した本は、主人公にとつては特別なもの。

自分とともに境遇がよく似た女性の生涯を描いた本である。

なので、みちるがその本を読んでどんな感想を持つか、非常に気になつてゐる。

主人公は本を読ませることで、みちるに自分のことを、間接的に知つてもらおうとしている。

「ゆずこさん、先輩、こんにちは！

【みちる、本当は急いで返す必要はないのだが、一回でも多く、少しの時間でも、主人公に会いたくて持つてきた】

先輩、今日はお休みのところすみません……。

明日からテスト期間でお休みいただくので……お借りした本、お返しに来ました。  
その、すごく感想を語り合いたい本だったの……早くお会いして、お伝えしたくて！  
ゆずこさんもこの本お読みになられました？」

「読んだ読んだ。それさ。主人公があんまり……

『かわいそうで』と言いかけるが、本の主人公と主人公は非常に境遇が似ていることを思  
い出し、これでは見下しているようだと感じ『不運』と言葉を変える

【不運で！ 腹立つちやつたよ。

【主人公を指して】

読み終わった後『こんなのがあるか！』って怒り狂つてこの人に電話しちやつたもん。  
ねえ、みちるちゃんはこの本を読んで

ゆずこ、本の表紙を見て、主人公がなぜみちるにこの本を貸したかを即座に察する。

ゆずこ、主人公がみちるに自分の境遇を打ち明けようとしているため、まずこの本を読ませ、みちるがどう感じたか反応を見ようとしていると考える。

なのでみちるに『この本を読んでどう思った？』と質問しようとする。

しかし、そこで店の扉が開き、反射的に来店客の方を見て、ゆずこは息をのむ。

来店したのは、主人公を裏切つて別れた、主人公の元恋人（※以降、『元恋人』とする）  
だつたからである。

SE・B7の3 店の扉が開く音 ※0—3秒目くらいまで

【信じられない。自分の目を疑つてゐる】

ねえ。今入ってきたのって。あれって……あいつ……？

【声が低くなる】

なんで、来てんの」

SE・B7の4

ゆずこが椅子から立ち上がる音

SE・B7の5

ゆずこが元恋人のところへ向かう、二つ、二つという足音 ※8—13秒

くらい

ゆずこ、元恋人に冷たい声で話しかける。

【低くて静かな声 ※過剰な印象にならないように気を付けてください】  
……ねえ。あんた、何しに来たの？」

少し長めの空白。

十数分後。

主人公、店から逃げるように出で、更衣室に隠れている。元恋人の顔を見たくないあまり、ここまで来てしまった。

主人公、自分でも、なぜこんな行動をとっているのかわからない。

今日休みの自分はここにいるべきではないし、このままここにいると、他の従業員の迷惑になる。

だが、足が動かない。隅にしゃがんだまま、立てなくなってしまっている。

そこに、みちるがやつてくる。

SE・B7の6

ギイイ、とゆづく木の扉が開く音

【心配そうに】

……先輩。大丈夫ですか？

【少し間をおいて】

さつきの人、ですけど。

【少しうるさい】

【ゆずこと従業員たちが、瞬く間に追い出したのを思い出して、再来訪は無理だろうと判断する】

もう、来られないと思います。ゆづこさん、すごい剣幕でしたし。

金剛寺（こんごうじ）さんに、即、追い出されてましたし。

うちのお店にはあんな筋骨隆々のおじさ……いや、オネエさんがいるんですから！ 安心

安心です。

【周囲の驚き方や、あつという間に追い出された雰囲気から、先ほどの客が、主人公と親しい人物であつたと察する】

あの人。……先輩と昔関わりのあつた、人なんですね。

【おそらく主人公の元恋人である、と考える。いらっしゃるし、もやもやする。思わず『ゆずこさんと同じく、わたしもあんまりあの人好きじやないです』と言いかける。しかしその前に、主人公が憔悴しきっているのに気づく】

なんか……。先輩？ 大丈夫ですか？

【大丈夫だよ。ごめん、みちる。今日はもう帰つて……】と言われ。普段は従うところだが、明らかにおかしい主人公の様子が気になる】

でも……。先輩、なんだか……】

しばしの沈黙。

主人公、みちるに説明すべきであるとわかっているが、声が出ない。

元恋人は、主人公の事情、つまり『過去の病気と手術により、妊娠・出産が難しいこと』『身体に手術痕があること』『手術痕は見せたくないでの、交際しても肌は見せられない。したがつて、セックスはしない』を理解したうえで交際を始めたはずの相手。

しかし最終的には『やはりセックスできないのはつらい』『というよりも、主人公につまでも心を許してもらえていないようで悲しく、耐えきれない』という理由で別れた。つまり、主人公にも問題はある、元恋人にも言い分はあるのだが、ゆずこはとにかく元恋人を毛嫌いしている。

また、別れる際に『もう店には来ない』と約束したのを破つたため、金剛寺が追い出した。

みちる、約束を破つて現れた元恋人は、主人公とより戻すために来店したのだろうと考えている。なので、先ほどまでは元恋人に対し『なんと身勝手なのか』と強い怒りを感じていた。

みちる、正直なところ焦つており、頭の中は『元恋人に主人公を奪われたくない』とう氣持ちでいっぱい。主人公が、元恋人に心動かされているのではと、不安でたまらない。

しかし、こんな時だからこそ冷静に、ベストの対処をしなければ、自分は元恋人に確実に負けるだろうと感じている。

なので、主人公は今どんな気持ちで、何を欲しているのか必死で考える。

【意を決して、主人公に従わず、声をかける】

あ、の……。考えたん、ですけど。

こんなのは、どうですか。

先輩は、別にわたしに甘えたり。頼りたいなんて思つてないけど……。

わたしが今『どうしてもお願ひします』と言ったので。

仕方なく、わたしに付き合つて。抱きしめられる、だけ。  
しようがなく……頭を撫でられる、だけ。

【少し間を置き、自信なさげに。内心、この理屈は難があると感じている】

……って、いうのは……」

しばしの間。

主人公、目に涙を浮かべながら『ごめん、今だけ……』とみちるに身を預ける。

SE・B7の7 どさ、と主人公がみちるに身を預ける音 ※0—1秒にいかないくらい  
服を脱がせてる? ような音が始まる前に止めてください

【信頼されているようでとても嬉しい】

先輩……」

SE・B7の8 とん、とん、とみちるが主人公の背中を撫でる音 ※0—4秒くらい  
ゆっくりめに

主人公、みちるに抱きしめられながら、堰を切ったように話し出す。

『昔親しくしてた人だつた。でも、良い別れ方をしなかつたから、今はもう会いたくない。  
なのになにして、今になつて店にやつてきたのかわからない。私はもう、顔も見たたくない』  
と、涙ながらに語る。

みちる、普段とまるで違う様子の主人公に驚きつつ、話を聞き、主人公を落ち着かせる一  
とに集中する。

内心『よかつた、主人公は元恋人とよりを戻す気はなさそう』『今主人公の近くにいるの  
は、元恋人ではなくわたし』と安堵している。

しかし、今優先すべきは主人公の不安を和らげる、ことだと考え、実行する。

「はい。大丈夫ですよ。ここは安全です。あの人はもう来ません。  
……もし、来たとしても。

【少し間が空く。本当は『わたしが守ります』と言いたい。しかし冷静に非力な子どもである  
自分一人では無理だ、主人公を助けられない。と悟り、言葉を変える】  
……また皆が助けてくれます。だからもう、大丈夫ですよ】

\* \* \*

## ⑧『【一年前の六月】習い事を始めました』（637文字）

⑦から一週間後。

主人公、ぼんやり近所を散歩しているうち、みちるの家付近まで来てしまった。

主人公、⑦の件で『みちるに醜態をさらしてしまった』と深く落ち込んでいる。その後みちるはテスト期間に入ってしまい、予定通りアルバイトには来ない日が続いている。

主人公はこの、みちるのテスト期間が嫌い。

いつの間にかみちると会えないこと、話せないことを淋しく感じるようになっている。しかし、以前テスト期間中に連絡が来た際『私と話してないで勉強しなさい』と言つてしまつた手前、こちらからは連絡できないし、当然みちるからも連絡はなかつた。

会えない間にも何度もこの前のことを思い出し『あろうことから年下のみちるに泣きながら甘えるなんて。あの場では優しくしてくれたが、内心みちるは呆れているのではないか』という、悪い想像だけが膨らんでいく。

一方みちるは、あの日ゆずこと連絡先を交換し、主人公の様子は、ゆずこから聞いている。あれから元恋人は店に来ていないし、関係者は皆警戒しているので、おそらく安全だとうのはわかっている。

なので、ゆずこの『主人公のことはあたしらに任せて。みちるちゃんはテストに集中しない』との言葉に従い、勉強に励んでいた。

みちる、あの日以来、自分の意識が大きく変わったのを感じている。

以前はただただ主人公を『憧れの人』『理想の人』と美化して信奉するばかりだったが、今は主人公も一人の普通の女性で、怖いものや苦手なものがあり、支えを必要としているのだと感じている。

自分がその支えになるためにはどうしたらいいか。そんなことばかり考えている。

その結果、『心身ともに強く優秀になり、主人公に何かあったとき頼れる存在になろう』という結論に至り、かねてから関心のあつた武道を習い始めたことにした。

テストも終わり、明後日からバイトに復帰するので、その時に話そうと考えている。

主人公とみちる、別々に歩いていると、通りで偶然出くわす。

SE・B8の1 環境音（小さな音でずっと流す）  
SE・B8の2 足音（10秒くらい「あつ！ 先輩！」で足音が止まる）

【遠くから主人公を発見して】

あっ、先輩！ こんにちは！

こんなところでお会いできるなんて！ わあ。今日はついてるなあ。

【お元気そうでよかったです】と言いつこうになるがやめ、普通に話しかける【

はい、テスト終わりました！ 明後日から、バイト復帰できますよ。

先輩はお買い物ですか？

【主人公が不思議そうに自分の荷物を見てしているので】

ああ、これですか？

わたし、今日から空手習い始めたんです！ 今はその帰りなんですよ。

【普段は『お父さん』と呼んでいるが、主人公の手前、きちんととした言葉遣いをしたい】

父の知り合いに空手教室をやってる方がいて。わたしも混ぜてもらうことになりました。

【『どうして？』と聞かれ。主人公はみちるに、スポーツをする印象がない】

『どうして？』と、言うと。

その、強くなろうと思って。

……いざという時のために？

だから、ひょろひょろの『もやしつ子』は卒業することにしました！

これから、強くなりますよ。もつと先輩のお役に立ちます！」

みちる、意氣揚々と話してしまったが『習い事を始めたと言つたら、多忙と判断した主人公が、自分のアルバイト勤務時間を減らしてしまうのでは』と気づく。  
みちるにとつて主人公と会う時間が減ることは死を意味するので、慌てて補足する。

「あっ。もちろん、バイトは続けますよ！

これまで通り行くので……勤務時間は減らさないでくださいね！

【少し間が空き。勇気を出して話す】

……あの。実はこれ。先輩のお陰なんです。

武道。元々、興味はあつたんですけど。なかなか勇気が出せなくて。

でも。わたしが以前先輩に『やりたいことがあるけど、自分にできるか、続けられるか不安だ』ってご相談した時。先輩は、こうおっしゃいましたよね。  
どんなことも、始めてみるのが大切だって。

もしうまく行かなかつたとしても、新しいことに挑戦する気持ちは、とても素晴らしいものだつて……。

だから、始めてみることにしました。

わたし。先輩のお陰で前向きになれたんです！」

みちる、実は勇気を出して教室に通い始めたものの、今日一日体験してみて、スポーツが

苦手で身体も小さい自分が、果たして習い続けられるのかさうそく不安を感じていた。  
しかし偶然主人公に会えたことで一気に気分が明るくなり『今日は最高の日だ』と感じている。

主人公も、いつもと変わらぬみちるの言葉に不安がほぐれ、ほつとする。  
思わずみちるを夕食に誘う。

「【今日はこれから用事あるの？ もし時間があるなら、またうちでご飯食べていきませんか？ 空手の話も聞きたいし、久しぶりに、みちると話したいな】と聞かれ】  
えつ？ 今日これからですか？」

【必死で予定がないことをアピールする】

何にもないです！ 暇です！ すぐ暇です！

わあ、嬉しいです！

【興奮のあまり『母』という呼び方にするのを忘れる】

い、今お母さんに連絡しますから。あ『お母さん』って言っちゃった。

【言い直しつつも、嬉しくてしようがない】

母に、遅くなると伝えますので……ぜひ夕食、二一緒に緒させてください！」

\*\*\*

## ⑨『【一年前の六月】付き合わないの？』（595文字）

⑧から数日後。

主人公、今日はゆずこを自宅に招いている。  
ゆずこ、⑧の件については、みちるから連絡があつたので知っている。  
ゆずこ、主人公とみちるはもう、はたから見れば十分仲がいいし、ゆずこから見ても、み  
ちるは信頼できる存在だと感じている。  
だから、そろそろ主人公は、みちるに自分の境遇を打ち明けるべきだと感じている。  
今日は絶対その話をやってやるぞ、と思いながら、チャンスをうかがっている。

SE・B9の1 ゆずこが飲み物を飲む音  
SE・B9の2 ゆずこがカップを置く音

【自然な感じを裝つて】

話したの一？ みちるちゃんに。

『何が？』って。白々しいぞ？

まあ何がとは言いませんけど。

【『そうだ、この前主人公がみちるに貸していた本。あれは、主人公が秘密を話したいと思

つてている何よりの証拠である!』と思い出す。あくまで自然な雰囲気を装っているが、実際は必死で色々考えて話している】

あんたがこの前みちるちゃんに貸した本つてさあ。あたし覚えてるよ。

あんたにそつくりな人が主人公の話じやん。

つらいことがあって、ひとりぼっちになつて。

……でも、年下の素敵な人に出会う女の人の話。

ええ。そろそろ、正直になられたらよろしいんじやないかということです。

もちろん、色々悩んじやう理由もわかるけど。いいと思うよ、あたしは。

あの本は……本当にあつた話だから。ハッピーエンドなのか微妙だし。

年下の恋人は、いつも完璧とは言えなくて。

一部の展開にはあたしも怒り狂いましたけど……あの本を貸したつてことは、あんたはみちるちゃんに、自分のことを間接的にでも知つてほしい。そう思つたつてことだよね。みちるちゃんは、あんたの話なら、楽しくない話でも、つらい話でも。真剣に聞いてくれると思うよ。

だから、話してみればいいと思うのです。

【その後のこと】とはつまり、みちると交際するか否か、ということ】

その後のことはその後考えればいいじやない。

今日来て思った。なんか明るくなつたよね。この家。

近くにあつた、以前来た時にはなかつたおしゃれな家具を指して】

前はこんなのがなかつたよね?

見え見えですよ……年上の、おしゃれなお姉さんを気取らうとするあんたの魂胆が……。

見え見えなんだからさ。素直になつとけよ。

それに、もしかんかあつたら、またあたしが喧嘩してやる。この前あいつが來た時みたいにね!

あ、それは大丈夫? ふふ。……うん。あたしも大丈夫だと思う。

【がんばれ】と言おうとして、無責任な言葉のような気がして言いかえる。これが自分にとつて最大限できることだと感じている】

応援してるよ】

\*\*\*

⑩『【一年前の七月】告白』(830文字)

⑨から二週間後。

主人公とみちる、今日は外で会っている。

主人公、ゆずこのアドバイスを受けて、みちるにすべてを打ち明けることを決める。

ゆずこの言う通り、みちるは真剣に聞いてくれるだろうが、なぜだか主人公は不安でたまらない。

年下の友人に自分の境遇を打ち明けて『これからも仲良くしてください』と言うだけなのに、どちらかというと、主人公の気持ちは、片想いの相手に『自分にはこういう事情があるが、それでも自分と交際してくれますか』というのに近い。

一方みちるは、主人公がこれから何を話すのか、わかるようでわからない。

⑦の件を今でも申し訳なく思っているらしい主人公は、おそらく元恋人についての説明をしてくれるのだろう……。と考えているが、その割には主人公が緊張しすぎているよう気がする。

そんなに二人はひどい別れ方だったのだろうか。それとも主人公は、元恋人にあんなに怯えるほどひどいことをされたのだろうか。

であるならば、元恋人、許さん……と思っている。

SE・B10の1 環境音 冒頭10秒くらいまで流し、それから台詞。全編で小さく流す  
SE・B10の2 飲み物の中の氷が鳴る「からん」という音

【ドキドキと切り出す】

先輩。あの、お話しというのは……。

【『楽しい話ではないんだけど、みちるに聞いてほしい話があるの。今日はそれを伝えたくてお呼び立てしました』と言われ。思わず構える】

はい。なんとなくわかつてます……わかつて、るんです。

詳しいお話を聞かなくても。先輩には、わたしに出会うまでに、たくさん辛いことがあって。

【言うだけで辛い。身を切られるような気分】

それが理由で。今は、あまり。恋愛とかには積極的になれない。っていうのも……。

【『うん。そうなの。みちるには話さなくともわかつちやうんだね』と悲しそうに微笑まれ。あれ? これ、告白する前に振られる流れじゃない? わたしこのままじゃ、流れで『先輩の良いお友達になりたいです』とか言っちゃうそじやない? と内心真っ青になる】

だからわたし、その……」

みちる、主人公の口から改めて、今は恋人を作る意思がないことを知り絶望している。自分たちはやはり、年の離れた友達という関係で終わってしまうのか。と泣き出しそうになる。

みちる、主人公の言葉を受け止め『そんな前向きになれない点も含めて、先輩の支えになりたいです。先輩より年下だけど、わたし、先輩の信頼に足る良いお友達になりたいです』と言えば、主人公の信頼を勝ち取ることができるとだろうと感じる。

しかし、主人公と交際できないのは仕方ない。でも、自分の気持ちを偽ることだけはしたくない、と感じる。

せっかく仲良くなれたのに、告白することで関係は壊れるかもしないし、気持ちを伝えて迷惑に思われるのはとても辛い。アルバイトもきっと辞めることになるだろう。

だが、それでも嘘だけはつきたくない。この気持ちだけは大切に守りたい。と考える。

【告白する前に振られるのだけは嫌だ！ と慌てて】

……やっぱりお待ちください！ 先輩。わたし、お伝えしたいことがあります！」

SE・B10の3 勢いあまって、みちるが机に手をぶつける「カタン」という音  
SE・B10の4 みちるが慌ててかばんの中を探る音 ※フルで流す

みちる、手帳の中に入れている、②で主人公からもらった飴の包み紙を取り出し、見せる。

【②で主人公からもらつた、飴の包み紙を見せて】  
先輩。……これ覚えてますか。

【主人公はみちるの突然の行動にぽかんとしているだけで、もちろん覚えている。だが、黙つている主人公にみちるは『やつぱり覚えているわけないよね』と感じ、苦笑してしまう】  
覚えてないですよね。先輩が、初めてわたしに声をかけてくださった時にくれた……飴の包み紙です。

『こんなものを』って思うかもしれないんですけど……わたしは、今でもこれが、大切な宝物なんです。

……あの時、先輩に話しかけてもらえて、本当に嬉しかった。『友達ができない。学校行きたくない』なんて、今じや笑い話ですけど。あの時は本当に辛かつたから。

先輩。わたし、あの時からずっとあなたのが好きです。

先輩がくれた、優しい言葉。貸してくれた本。一緒に食べたり飯の味。

どんな些細なことでも、わたしは全部覚えてます。先輩がくれるものは、全部わたしの宝物だから。

だから、何もいらないです。今までと何も変わりなくていいんです。

ただ、先輩が困った時や辛い時に……。

この人のことは頼つていいんだ。気軽に電話したり、急に呼び出していいんだって思える人に、わたしを加えてくれませんか。

【主人公が何か言いたげなのには気づいているが、一気に言い切る】

わたし、年下だけど。チビで、頼りないかもしねないけど……。誰よりも先輩が好きなんです。先輩がいるなら、何でもできる気がするんです。先輩の力になりたいんです！だから……だから。

【みちる……】と、主人公が言葉を遮ったので【

……え？

【待つて……話を聞いて……】と言われ、眞面目に】

はい。聞きます。

【正直なところ、みちるのことどう思つてるのか、自分でもよくわからない】と言われ。落胆して。やはり自分はこれから振られるのだと思い込む】

はい……。そう、ですよね……わかつてます。

【でも、会えないときも嬉しい。連絡を取らない時期は、なんだか退屈で】と言われ。食い気味に】

え？ それはわたしも一緒にです！

【すてきなことがあつたら、一番にみちるに話したい。面白い本や映画があつたら、みちるにも観てもらつて、みちるの感想が知りたいて思う】と言われ】

わたしも！ わたしもです！

【みちると、もつとたくさん一緒にいたい。抱きしめたり、好きだつて言つていい関係になりたい】

あつ……その……それは……？】

しばしの沈黙。みちる、状況が把握できていない。まとめるのに時間を要する。

「あの。話を総合すると。

先輩も。わたしと同じように思つてくださつてる。  
ということになるのでしょうか……？

【そのようです……】と、主人公が顔を真っ赤にして、小さな声で言ったので信じられない。思わずうめくような声を上げた後、感激のあまりいつもより大きな声が出る】

あ…………せんぱーい！ 大好きです！

絶対、幸せになりますので……わたしとお付き合いしてください！」

\*\*\*

(11) 『【一年前の十月】はじめのキス』（795文字）

十月のある週末。

主人公、体調を崩し、自室のベットで寝込んでいる。

本来なら一人で治療に専念するところだが、今回はなんだか心細い。

うつる類のものではないため、思い切ってみちるに連絡をしてみたところ、みちるは即座にやってきた。

SE・B11の1

部屋の床をゆっくり歩く音

【体調の悪い主人公を気遣つて、努めて優しく声をかける】

せんぱーい？ 具合、良くなりました？

うん。少し顔色が良くなられてますね。安心しました。

はい。うつる類のものではないと、わかっていますよ。

今朝、先輩が体調崩したって聞いて。

お母さんまで『お見舞い行く！』とか言つてたんですけど。それは止めたので大丈夫です。

今日はわたしが。先輩のお世話をさせていただきますからね」

みちる、不謹慎ではあるが、主人公が自分に頼つてくれたことが内心とても嬉しい。交際を始めて四か月ほどが経つが、二人はまだ抱きしめあつたり、手をつなぐ以上のことはしていない。

あの後、主人公の境遇を知つたみちるは、すべて納得の上なのでまるで気にしていないが、主人公は最近それを不自然に感じ始めている。

自分から言い出したことで、最初はその条件に安堵していたはずなのに、今は残念に思う自分がいる。

SE・B11の2 みちるがベッドの前に座る音 ※0—3秒目くらい

【『ごめんね。わざわざ、来てもらっちゃつて』と言われ】

いいんですよ！ こういう時のために、わたしがいるんです。

……この言葉、覚えてらっしゃいますか？ 貴、先輩がわたしにおつしやった言葉です。

【⑤を参照。当時を思い出して、しみじみと】

あれは、嬉しかったなあ……。

【少し間が空く】

最近思うんです。わたし、先輩のことが大好きだけど。

きっと、先輩とどうにかなりたかったわけじやなくて。

ただ、わたしにたくさんのものをくれた先輩に……。

何かお返しできる人になりたかった。それだけなんだから。今日は少しそれが叶つたみたいで、嬉しいです！」

SE・B11の3 みちるが立ち上がる音 ※0—3秒くらい

「さ、眠つててください。わたし、あっちでゲームしますから。

してほしいこととか、欲しいものとがあったら、すぐおっしゃつてくださいね。

『用意しますから！

【『声を出しづらかつたら、メールを送つてくれても良いですよ』と言おうとして】  
声を出しづらかつたら……え？」

主人公、昔少し親切にしただけなのに、それだけで自分を好きだと言って、ずっと何の見返りもなく尽くしてくれるみちるがたまらなく愛おしくなる。

氣を遣つて隣の部屋へ移動しようとするみちるを、思わず『してほしいこと、ある……』と呼び止める。

「【『手を握つてほしいです』と言われ。嬉しくなる。主人公が、恥ずかしがつたり、照れているときは敬語を使うことを、みちるはもう知っている】

ふふ……こうですか？ わかりました。先輩が寝ちゃうまで、こうして、手を握つていま  
すね。

手繋いでると。すぐ、安心しますよね……。

【『まだお願ひしたい……』と言われ。嬉しくなりつつ、おそらく『寝ても手を握つていて  
ほしい』くらいのことかな、と考える】

え？ まだお願ひが？ はい！ なんなりとどうぞ！

主人公、みちるの手を握り『みちるとキスしたい』とつぶやく。  
みちる、予想だにしないお願ひだったので、驚きのあまり固まってしまう。  
しばしの沈黙。

「え？ ……それは。いいんですか……？

【『これは、断つてもいいお願ひです。私がしたいだけだから』と言われ。早口で】  
断るわけないです。

【『キス』を言いづらそうに】

先輩と……キス。したいに決まってるじゃないですか……」「

【『目を閉じて』と優しく言われ、従う】

先輩……はい……。

【少し間が空いてからふれるだけのごく短いキス】  
ちゅう……

主人公とみちる、手をつけないままキスする。

みちる、突然の出来事に、キスした後でもこれが本当に現実か信じられない。自分は夢を見ているのでは、と感じる。

【嬉しさのあまり、声が震える】

あの。先輩……嬉しいです……。

もう一回。したいです……。

【返事を待つ前に、一回どころか、三回キスされる】

ちゅう。ちゅう。ちゅう……ん……。

【少し間が空いて、次第に主人公とキスした実感がわいてくる】

あ、あの。わたし、今、初めてキスしました。いやもう……四回?】

主人公、喜びのあまり顔を真っ赤にし、目を潤ませるみちるが可愛くて仕方がない。さらにもう一度キスする。

「あっ……ちゅう。

【幸せそうに】

これで、五回。ですね……。

【隣の部屋へは行かないでください。このまま、手を握っていてください。心細かった……みちるが来てくれて、本当に嬉しかった。今日は……】と言われ。主人公が最後まで話す前に答える】

はい……。あっちの部屋にはいきません。ずっと手をつないでいます。今日は……泊まつていきますから。

何でもお願ひしてください。体調が良くなるまで。ずっと、ずっと先輩のそばにいます。

【声が震える】  
だから……。  
だから……。

【『もう一回キスしてくれませんか』と言った前にまたキスされる】  
ちゅう。

【少し間が空いて、泣きそうになりながら】

先輩。大好きです……」

＊＊＊

⑫『〔今年の三月〕 大丈夫ですよ、先輩』（309文字）

三月の真夜中。

主人公、泊まりに来たみちると一緒に眠っていたが、悪夢を見て目を覚ます。内容は思い出せないが、目を覚ますと涙を流して、汗をびっしょりかいていた。起き上がりて顔を洗い、着替えて布団に入るが、まだ眠れない。

しかし『悪夢を見た』程度のことでもみちるを起こす気にはなれないし、そういうことをして許されるのは、自分よりもっと若い女の子だけだろうと思う。なので、ただみちるの眠る姿を隣でぼんやり見つめていると、みちるが目を覚ます。

SE・B12の1 がさ、と衣擦れの音

【寝ぼけている】

……ん？ 先輩……？ 起きて、たんですね……。

【うん。目が覚めちゃった】と言われながら、優しく頭を撫でられて【  
……ふふ。

【『眠れなくなっちゃったから、みちるの寝顔見てた』と言われ。少し間が空いてから】もしかして……怖いこと、思い出しちゃったんですか？  
それで眠れなく、なっちゃってたんですか？

【優しい声で】

起こしていいのに。

【『わかるの？』と静かに聞かれて】

わかりますよ！わたし『先輩マニア』ですから。

隠したって。先輩のことは何でもわかっちゃうんです。ふふ】

SE・B12の2 みちるが主人公を抱きしめる音 ※0—2秒目くらい

【真剣に、ささやくように優しく】

大丈夫です……大丈夫ですよ、先輩。

【あえて『わたし』ではなく『みちる』と言つて、自分の存在を強調する】みちるがここにいます。

何があつても、絶対に先輩のことが好きで。絶対離れていかない人がここに一人いる。そう思うと……少し、安心しませんか？

頼りない、わたしかもしれないけど。先輩が『いやだ』って言つたつて……。

### 【手を握つて】

ほら。わたしは。先輩の手を放しません』

SE・B12の3 みちるが主人公の背中をとん、とんと叩く音 ※0—4秒(とんとん×2回分) くらい

「大好きですよ……。ずっとわたしは、先輩のそばにいます。  
だから、安心して眠つてくださいね」

\*\*\*

### ⑬『【一か月前】わたしの『してみたこと』リスト』(342文字)

五月。本編の一か月前。もう少しで定期テストの季節。

二人、主人公の自宅で一緒にいる。

みちるは今回もテスト勉強のため、休みをもらうことになつていて。

それはすなわち、二人がしばらく会えないことを意味し、期間中は一切連絡も取らない」としているので、お互い、なかなかにつらいものがある。

そこでみちるは、ある提案をする。本編につながるエピソード。

【今にも死にそうな声で】

先輩……悲しいお知らせです……。

【これ以上苦しいことがあるのだろうか、という感じで】

此度もテスト期間が迫つて参りました……。

これ、勤務希望です。この日から、一週間お休みを頂戴します……。

『仕方ないこととはわかつていますが、辛いですね……。当店としても、わたくし個人としても、一週間にもわたる羽鳥様の不在は、耐えがたき痛手でござります』と言われ。主人公がのってきて、自分と同じ芝居がかつた口調になつてるので面白い。時代劇ごっこのようになつてくる】

はい。わたくしも身を切られるような痛みを感じております……。

そこでわたし……今回このようなものをしたためてみました。

その名も『してみたいことリスト』でございます。

内容は、名の通りでございます。

先輩と、してみたいこと。行つてみたい旅行先から、映画で見た憧れのシチュエーション。

果ては、個人的な妄想まで。もうもう詰め込んでみてございました。

あつ壁ドンとか派手なのはないです……先輩のキャラクターを考慮した上で執筆しました

のや。

次に、お会いする時までに。これだったら、してもいいかな？　って思えるものがいい  
ましたら。

【明るく、嬉しそうに】

考えておいていただけたら……嬉しいですー！」

**アラームボイス1 「朝の挨拶」（77文字）**

「先輩。おはようございます。

お目覚めの時刻ですよ。起きてください。

ふふ……寝起きでぼーっとする先輩、可愛いです。

今日も一日、わたしがお手伝いしますからね！」

**アラームボイス2 「作業開始」（23文字）**

「先輩。お時間になりました。作業を始めましょう！」

**アラームボイス3 「休憩時刻のお知らせ（暖かい季節）」（41文字）**

「先輩。休憩時刻ですよ。

少しお散歩にいきませんか？

今の季節、お花がとっても綺麗ですよ」

**アラームボイス4 「休憩時刻のお知らせ（寒い季節）」（60文字）**

「先輩。休憩時間になりましたよ。

今日は冷えますね……。

じやあ、時間いっぱい、くつついていましようか……。温めて差し上げます」

**アラームボイス5 「もうすぐ終了時刻」（21文字）**

「先輩。あと少しです！ お茶をお持ちしましたよ」

**アラームボイス6 「作業終了」（44文字）**

「先輩。終了時刻になりました。今日もお仕事お疲れ様です。  
あの……この後お時間、ありますか？」

**アラームボイス7 「就寝のご挨拶」（34文字）**

「先輩。お休みの時間です。

はい、ちゃんと手を握っていますよ。

……おやすみなさい。大好きです。今日も一日、先輩といられて幸せでした」